

オリオン・クラウタウ編

『戦後歴史学と日本仏教』

(法蔵館・二〇一六年)

石井 公成

「戦後体制からの脱却」を主張しておりながら、理想化された戦前への復帰を熱望するばかりで戦後やそれ以前の歴史に暗い人物が総理大臣となっている現在、戦後歴史学が日本仏教をどう論じてきたかを検討した本書は、まさに意義ある試みと言えよう。『近代日本思想としての仏教史学』を刊行し、この分野での若きリーダーの一人となったオリオン・クラウタウが編集した本書は、クラウタウの「序文——戦後歴史学と日本仏教」に続き、十五人の研究者の生涯と学説について論じている。年齢順の配列になっておらず、花形だった家永三郎（一九一三―二〇〇二）に始まり、大きな問題提起をなした黒田俊雄（一九二六―一九九三）で終わっているのは、戦後歴史学が親鸞を尊重する進歩派の研究者によって領導されてきたこと、その見直しが課題となっていることを象徴するものだ。古田紹欽、中村元、石田瑞麿、田村芳朗など、歴史学者とは呼べない仏教学者も含まれているのは、歴史学者への影響の大きさを考慮したためだろう。

「序文」では、戦後の仏教史学者たちは、近代仏教における「革新的」な思想や運動を「仏教近代化」の象徴ととらえて評価する一方、国家に親和的な思想や運動については「封建的残滓」「皇国史観」といったレッテルを貼るのみでその歴史的な意義について言及することは稀だったと述べている。これはその通りだ。ただ、クラウタウはそれに続けて、二〇〇〇年以後は近代日本における国家と仏教に関する研究が進んだと説いているが、この面はまだ不十分でなからうか。皇国史観などは、伝統重視のようでありながら実際には近代の産物であり、ヨーロッパのナシヨナリズムの影響も強いことなどに関する研究は、始まったばかりであるからだ。

クラウタウは、「本書も二十一世紀初頭における日本仏教研究の意義を振り返るうえで、いつの日にか、考察の対象となるかもしれない」と述べている。いずれそうなるだろうが、現時点で一点だけ指摘しておこう。「序文」が菊池大樹「笠原一男——戦後歴史学と総合的宗教史叙述のはざま」の概要を説明するにあたり、「女性と仏教」のようなテーマに関しても論述した笠原」と記している点だ。これは、菊池自身が「女性と仏教」という節を設けて論じているのを承けたものだが、「女性と仏教」という言い回しは、フェミニズムの高まりの中で女性史の見直しが始まっていた一九八三年に「女性と仏教」という論文を発表した大隅和雄や女性史の西口順子を発起人とし、「研究会・日本の女性と仏教」が発足して、この両人の編集で

一九八九年に『女性と仏教』シリーズ四冊が刊行されたことによつて広まったものだ。それ以前は、女性の位置を真摯に検討しようとした笠原にしても「女人往生」といった形で問題を追求しており、一般には「仏教と女性」といった言い方をしていたのではなかったか。「女性と仏教」という新しい表現を用いてしまうと、笠原の研究の先駆性と、先駆者なればこそその問題点がばやけてしまうだろう。

なお、筆者は、本書が刊行されるとすぐに大学の講義で触れ、クイズの題材とした。本書で論じられている研究者の学説の概要を紹介した後、「この研究者の出身大学は国立か私立か、関東か関西か、歴史学か仏教学か宗学か、僧侶かそうでないか、勤務先はどんな大学、学科か」などについて尋ねたのだ。インド仏教の文献的研究の中心であった東大の印度哲学科で学んで大学院にも進んだ後、京大の国史学科に入り直し、真言宗の高野山大学で教えるうちに庶民の民俗的な信仰の研究を始め、真宗の大谷大学文学部に転じて研究を大成した五来重の場合は、さすがに正解者はいなかったが、次々に試していくうちに、かなり当てる学生も出てくるようになっていった。このことは、研究者の説がその経歴・政治的立場・時代背景などによつてどれほど影響を受けているかを示している。この点は、本書でこれらの研究者について論じている担当者たちについても、それを読む我々についても当てはまることであり、反省材料となる。以下、個々の論文について簡単に紹介してゆく。最初は、末

本文美士の「家永三郎——戦後仏教史学の出発点としての否定の論理」だ。末木は、一九四〇年に刊行されて家永の処女作となった『日本思想史に於ける否定の論理の発達』を取り上げて解説し、本書の構図が以後の家永の著作の基本構図となったことを明らかにしている。すなわち、現状肯定の傾向が強い日本において、否定の論理を生かした最初は聖徳太子であり、徹底させたのは親鸞だとする主張だ。これは、西洋の宗教史の影響を受けて明治時代に形成された「鎌倉新仏教」尊重の図式を、西洋思想史の知識によつて理論づける試みにはかならない。末木のこの論考で注目されるのは、西行や鴨長明など、自然を絶対者のようにみなして救済を求めた者たちに着目した『日本思想史に於ける宗教的自然観の展開』（一九四四年）を、今でも示唆に富む試みとして評価したことだ。これは、草木成仏説の研究者である末木ならではの着眼点と言えよう。

なお、末木は冒頭で、一九八二年に書かれた家永の「私の研究遍歴」が、戦時中は「狂気のように絶叫される日本主義や戦争謳歌の風潮にはまったく背を向けて書斎の内の作業にのみ心を集中できた」と述べていることを事実と受け取っているように見える。戦後、教科書裁判を戦い抜き、『戦争責任』を著した家永が、戦時中には平泉澄流の狂信的な皇国史観や軍国主義に反発し、敗戦直後のにわか民主主義ブームにも迎合しなかったことは確かだが、ナショナリズムとまったく無縁だったと断言しきれるかどうか。家永は、「紅旗征伐、吾事に非ず」とう

そぶいた藤原定家に自らをなぞらえたうえで、傍観者であったことについて自責の念を表明しているが、親鸞を究極とする学問姿勢は、鎌倉新仏教を大乘仏教の究極と見た明治以後のナシヨナリステイックな仏教史観と無縁だっただろうか。末木に限りませんが、この『戦後歴史学と日本仏教』では、取り上げている歴史学者当人や彼らに影響を与えた人物たちの転向の問題が論じられていないのは惜しまれる。

次は、桐原健真「服部之総——「生得の因縁」と戦後親鸞論の出発点」。服部之総（一九〇一—一九五六）は、宗教を民衆の阿片と見る講座派のマルクス主義者でありながら、親鸞を高く評価し、左翼系の歴史学者に影響を与えたことで知られる。桐原は、服部が真宗寺院の出身であったうえ、論争相手であった三木清の親鸞論の影響を受け、戦後、親鸞研究に打ち込んでいくうちに、親鸞を「この世にお浄土をつくる」人物として再発見したと論じている。そして、宗祖としての神話をはぎとり、「農民と女性」とともにあった人間親鸞を教団から奪還して復活させることこそが、「農民と女性」を解放することだと服部は考えたという。服部の親鸞解釈については批判もあるが、家永三郎が自分の学説を裏付けてくれる主張として高く評価したことが示すように、学界に大きな影響を与えた。

平雅行「井上光貞——焼け跡闇市世代の歴史学」は、実証主義的な研究の立役者であった井上光貞（一九一七—一九八三）の平安浄土教研究は、没落する中下級貴族をその主体と見たも

のだが、これは貴族の家柄に生まれ、十八歳の時の病気で進学が遅れた自らの姿を重ねたものであると指摘している。これは正しいが、そうした面や井上の研究の弱い箇所を強調することに力をそそぐ反面、仏教学者からも評価された井上の学問的な意義に関する説明が少ない。時代の空気が井上の浄土教研究をゆがめたと批判した平は、「私もまたいつか、厳しく批判される日がやってくるのである」と書いているが、批判は既になされている。

林淳「圭室諦成——社会経済誌の日本宗教研究」は、「葬式仏教」という語で知られる圭室諦成（一九〇二—一九六六）が社会経済誌的な方法を宗教史に導入した意義を重視している。林によれば、真宗寺院に生まれ、曹洞宗寺院の養子となった圭室は、「祖師にかえれ」というスローガンを嫌い、祖師の思想を偏重する仏教研究を不十分と見て、「葬祭、治病、招福」を重んじる一般信者の信仰と、彼らに支えられて生活していた一般僧侶のあり方を追求したのであり、「葬式仏教」という語は単なる批判でないという。

大澤広嗣「古田紹欽——大拙に近侍した禅学者」は、仏教の既成宗派にとらわれずに、禅宗と仏教について思想史・文化史の幅広い観点から研究を進めた古田紹欽（一九一—二〇〇一）を論じたもの。古田が先駆的な研究をしたことは事実だが、紹欽の研究の弱い面、問題点についても触れてもらいたかった。

西村玲「中村元——東方人文主義の日本思想史」は、世界的

なインド思想・インド仏教の研究者であった中村元（一九一二～一九九九）の業績のうち、江戸時代の仏教に批判性や合理性など近代性の萌芽を見いだした点に注目したもの。中村は東西の幅広い知識にもとづいて論じており、内藤湖南が再発見した富永仲基について「近代の先駆け」と明言し、思想史に位置づけたという。釈尊の人間化を推し進め、仏教を近代的観点から評価しようとした中村の功績は大きいが、宗教面の把握の弱さなど問題点も指摘すべきではなかったか。

菊池大樹「笠原一男——戦後歴史学と総合的宗教史叙述のはざま」は、一向一揆研究の先駆者として知られる笠原一男（一九一六～二〇〇六）をとりあげ、研究領域と主張の変化について検討している。エンゲルスの『ドイツ農民戦争』を意識しつつ、一向一揆を門徒農民・下級武士・職人などによる「反封建闘争」と位置づけることから出発した笠原は、批判を受けて親鸞の思想と東国農民の関係の研究へと進むが、菊池はそこにユニークさと限界を見ている。菊池が取り上げている笠原の「女性と仏教」研究については、冒頭で記した通りだ。

岩田真美「森龍吉——仏教近代化論と真宗思想史研究」が扱った森龍吉（一九一六～一九八〇）は、熱心な門徒の家に生まれ、龍谷大学で真宗学を学び、夕刊京都新聞の論説委員や文化部長として仏教教団や大学の戦争責任の追求する記事を書き、レッドパージを受けた後、研究者となった人物だ。マルクス主義のほか、ウェーバーやロバート・ベラーなどの宗教社会学の

影響を受けつつ研究を進めた。晩年には真宗教団内の研究と教団外の研究の交流をはかっており、岩田は、その一例を、近代になって重視されるようになった『歎異抄』と江戸時代に発達した『教行信証』の研究を交差させるべく努めた点に見いだしている。これは重要な指摘と言って良い。

引野亨輔「柏原祐泉——自律的信仰の系譜をたどって」は、近代仏教研究の先駆と称されるものの、実際には中世から近現代まで幅広く研究していた柏原祐泉（一九一六～二〇〇二）について論じたもの。引野によれば、柏原は精神主義を「仏教の近代化」というより、宗教そのものの本質を近代に顕彰した試みとして評価する一方で、釈雲照や福田行誠らの戒律復興主義は従来の教団への批判であって、仏教本来の立場の確立を求めつつ近代仏教を生み出す役割を果たしたと評価していたという。これは、近年の旧仏教見直しに通じる視点であり、興味深い。

碧海寿広「五来重——仏教民俗学と庶民信仰の探究」は、大時代の同級生であった堀一郎（一九一〇～一九七四）と対比しつつ、仏教民俗学を打ち立てた五来重の学問について論じたもの。五来は、柳田国男の影響を受け、開祖や教団中心の仏教研究から離れて庶民の信仰の実態の解明に努めつつも、仏教を完全に否定するのではなく、民衆が共同でおこなう宗教実践こそが「御仏の心になう」と説くに至ったという。碧海は、五来が開拓した世界を高く評価しつつ、その主張には教理や教団や政治が庶民信仰に及ぼした影響を無視するなど、バランス

の悪い面もあったことを指摘している。

繁田真爾「吉田久一——近代仏教史研究の開拓と方法」は、まさに近代仏教研究者の代表である吉田久一（一九一五～二〇〇五）の研究が、戦時下のセツルメント活動と兵士として経験した沖繩戦の経験を原点としていたことを指摘している。繁田は、吉田の研究の意義を明らかにするとともに、内面性という面で「精神主義」を評価し、社会性という面で「新仏教」を評価する吉田の論調は、その統合された形を理想とする吉田の批判的立場に基づくとはいえ、固い二分法となつてしまいがちであり、吉田が敬愛する川上肇などについては割り切れないと論じている。

前川健一「石田瑞麿——日本仏教研究における戒律への視角」は、日本仏教の特質を考えるうえで重要な要素となる戒律の問題に取り組んだ石田瑞麿（一九一七～一九九九）が、日本仏教の社会福祉事業を跡づけようとするうちに菩薩戒の研究へ、さらに戒律全般の研究に進んだことを明らかにした。また、戒律の反面である女犯に関する石田の研究も重要だが、前川は、石田は実例を列挙するのみで「なぜそうなのか」に関する点が弱いという。前川の論述のうちで興味深いのは、石田は戒律研究では親鸞に触れず、親鸞研究では戒律に触れない姿勢で一貫していたという点だ。真宗の寺の三男として生まれながら、研究のために僧籍を取らなかったものの、石田の背景には親鸞があったということだろう。

近藤俊太郎「二葉憲香——仏教の立場に立つ歴史学」は、関西で大きな影響を及ぼした二葉憲香（一九一六～一九九五）について、マルクス主義の影響を強く受ける一方、仏教本来の立場を重視し、また国家と人民を対立的に見る図式を疑ったと説いている。ただ、二分法による割り切りが目立つことも指摘しており、そうした矛盾した面が二葉の特色なのだろう。二葉は、馬子を悪玉の民族仏教、聖徳太子を善玉の普遍仏教に配し、太子の継承者を親鸞とするが、家永以来の聖徳太子・親鸞評価の影響の大きさが痛感される。

花野充道「田村芳朗——思想史学と本覚思想研究」は、鎌倉新仏教至上主義を見直すうえで重要な役割を果たした仏教学の田村芳朗（一九二一～一九八九）について論じている。田村は、天台本覚論こそ大乘仏教の究極だとした島地大等や宇井伯寿の議論を受け、更に詳細に検討してこの分野を進展させた。本覚論文の成立年代をめぐって田村と盛んな論争をおこなった花野は、田村が法華宗で得度しておりながら布教活動と学問とを峻別したことを、自分自身の経歴と重ね合わせつつ強調している。田村自身の研究の性格も関係しているようが、歴史学の潮流との関係に関する言及はない。

最後は、鎌倉新仏教・旧仏教の図式以来となる大きな枠組みの変換をもたらした黒田俊雄を扱った佐藤弘夫「黒田俊雄——マルクス主義史学におけるカミの発見」だ。黒田は、戦後歴史学をリードしたマルクス主義史学の一員でありながら、一貫し

て親鸞を重視し続けており、マルクス主義史学の図式に完全には従わない形で新たな中世史像を描いてみせた。佐藤は、黒田は親鸞が対峙した相手を追求する過程で権門体制論を形成していったことを指摘し、もう一人の枠組み変革者であった網野善彦の主張と対比しつつ、黒田説の特質を明らかにしている。

以上だ。本書の有益さは明らかだろう。まさに「戦後歴史学と日本仏教」について考える際の見取図となってくれる意欲作と言って良い。全体について言えば、初めに述べたように、親鸞の影響が目立つ。十五名のうち、明確に親鸞を尊重する立場で研究したのは、家永、服部、笠原、森、柏原、石田、二葉、黒田の八名に及んでおり、彼らについて論じた担当者たちにも、やや異なる形ながら親鸞重視の研究者が多い。真宗は、明治政府の宗教政策とも関わっていたうえ、留学僧を多数送り出して近代仏教学の立役者となり、歴史学・仏教史学でも親鸞を尊重する僧俗の研究者を多数輩出して大きな影響を与え、また研究の対象となってきたおり、まさに本書のテーマの中軸に位置する存在だ。それだけに、真宗を中心とした議論とそうでない議論の違いを明らかにするなどの試みも必要ではなかったか。

「序文」では、本書で取り上げるべきだった研究者として、堀一郎、竹田聴州、田村円澄、池田英俊その他をあげているが、筆者としてはそれらの研究者たちに、さらに市川白弦、網野善彦、関山和夫などを加えた「続編」を期待したい。

（駒澤大学教授）